序論

民族・宗教・言語混成社会マレーシアのゆくえ
2013年総選挙結果から展望する

山本 博之　京都大学地域研究統合情報センター

2013年５月５日、マレーシアで第13回総選挙が実施された。独立以来50年以上にわたって政権党の座を守り続けてきた与党連合・国民戦線（Barisan Nasional、BN）に対し、2008年の前回総選挙で勢力を伸ばした野党連合・人民同盟（Pakatan Rakyat、PR）が「今度こそ！」（Ini Kali Lah!）を合言葉に政権奪取を掲げて選挙戦に挑み、マレーシア史上初の政権交代が実現するのではないかと国内外の注目を集めた。

この総選挙は、政権交代の可能性だけでなく、政党政治や選挙を考える上でも重要な事例を提供していた。たとえば、民族混成社会マレーシアでは歴史的に主要政党がいずれも民族政党（党員資格が特定の民族に限定され、その民族の地位向上を活動目的に掲げる政党）であり、政権を担当するには民族政党の連合体とならざるを得ないが、そのような社会で二大政党（連合）制は定着するのか。

また、ムスリム（イスラム教徒）が国民の多数を占める一方で、国民に相当の割合の非ムスリムがいる宗教混成社会マレーシアにおいて、イスラム国家の樹立を掲げる政党が合法団体として議会活動を行っているが、この政党はマレーシア社会でどのような位置を占め、どのような役割を担っているのか。さらに、複数の言語が使われている言語混成社会マレーシアで、インターネット上で展開される選挙戦が選挙にどのような影響を与えるのかについても関心が寄せられた。

このような関心を踏まえて、投開票から２週間後の2013年５月19日、日本マレーシア学会（JAMS）関西地区の主催により、京都大学稲盛財団記念館で公開研究会「二大政党制は定着するのか――2013年マレーシア総選挙の現地報告と分析」を開催した。

JAMSでは2008年の総選挙の際にも公開研究会「『民族の政治』は終わったのか？――2008年マレーシア総選挙の現地報告と分析」（2008年５月４日、５日）を実施しており、今回の研究会は５年前の研究会の議論を引き継ぐ形で実施した。2008年の研究会の内容は

DAP（民主行動党）のシンボルであるロケット型の看板にも「Ini Kali Lah（今度こそ！）」の文字が躍る〈サバ州コタキナバル〉

JAMSディスカッション・ペーパーとして学会ウェブサイト（http://jams92.org/jamswp）で公開している。マレーシアの各政党の略称や独立から現在までのマレーシアの選挙結果などのデータを掲載しているので、そちらもあわせてご覧いただきたい。

本報告書はマレーシアの選挙制度および政治状況と2013年総選挙の結果に関する章を設けているので、政党名・略語や選挙結果についてはそちらをご覧いただきたい。なお、本報告書では、政党名の日本語訳や人名のカタカナ表記について、各報告の執筆者や討論の発言者が特に指定した場合を除き、編集者の責任で表記を統一している。

2013年総選挙をめぐる三つの論点――二大政党制、連邦制、政治文化

この研究会を構成する三つのセッションは、今回の総選挙をめぐる以下の三つの問題関心にそれぞれ対応している。

問題関心①――二大政党制は定着するのか

マレーシアでは、民族政党が連立することで与党連合のBNが多民族的な構成となり、すべての民族が政府に代表を送る連邦政府が組織されてきた。野党もおおむね民族別に形成され、路線の違いから野党どうしの連携は難しいと見られてきたが、1990年代以降に

マレーシアの選挙でおなじみの旗は見られたが、1999年選挙で見られた手書きの看板はほとんど見られなかった〈サバ州タンブナン〉

大型スクリーンが設置され、動画を活用して観衆に訴える手法を使う政党が多くあった〈サバ州プナンパンでのチェラマ〉

は野党間の連携が進み、2008年総選挙では野党連合が結成され、複数の州で野党連合が州政権を担当して５年間の統治実績を積んできた。今回の選挙ではマレーシア史上初の政権交代の可能性があるとの観測も見られたが、これは野党連合が政権担当能力を十分に評価されるに至ったとも見ることができる。多民族社会で民族別政党が組織されてきたマレーシアで二大政党（連合）制が定着したと見てよいのか。

この問いに関連して、さらに以下のようなことがらに関心が向けられた。

政府の構成に関して、BN内の華人政党とインド人政党は2008年の選挙でも議席を大きく減らしていたが、今回の選挙でさらに議席を減らし、各民族の代表を政府に送るというBNの仕組みが大きく崩れたと言える。民族的マイノリティである華人やインド人の意見をどのようにして政府に反映させるのか。与党連合内の連立の組み替えや政党の再編はあるのか。

与党（与党連合）に関して、各党指導者は今回の選挙での「大敗」の責任を問われることになるのか。その場合、党首が辞任するだけでなく、各党の路線や活動に影響を及ぼすのか。華人政党やインド人政党のような民族政党の存在意義が問われることになるのではないか。

野党（野党連合）に関して。主要野党の３党は互いに路線が大きく異なり、野党連合が結成されて５年が経つが、野党間の連携はどれだけ定着しているのか。とくに、与党連合が多数派工作のため野党の一部と連携を模索する可能性があることから、野党の一部が与党連合に合流することによる野党連合の解消はありうるのか。

野党各党の指導体制はどうか。野党はいずれも少数のカリスマ的指導者が党を率いており、これらの指導者たちは政治家としてかなり高齢化している。野党各党で次世代幹部の育成と世代交代はどのようになっているのか。

野党連合への有権者の支持が大きかったことをどう理解すればよいのか。選挙運動期間中、与党連合の支持者から「与党連合は民族融和的で他民族に譲歩しあうことを是としているが、野党はいずれも自民族の権利ばかり主張する自民族優先主義的である」との批判が聞こえた。この見解の妥当性とは別に、現状がこのように理解され、語られることは、マレーシア社会にどのような影響をもたらしうるのか。

問題関心②――連邦制は実質化するのか

マレーシアは、形式上は連邦制をとるが、半島部では州の権限は極めて限定的であり、連邦政府の指導のもとで中央集権に近い統治が行われてきたと言える。その裏で、半島部ではマレー人、華人、インド人の３民族の境界が明確で、それぞれ政党を持ち、民族内の問題は民族内で解決するという「民族の連邦制」とでもいうべき国家運営の形式が発展してきた。

これまでのマレーシア政治分析は、マレー人、華人、インド人、サバ州、サラワク州の五つのブロックごとに行われてきた。今回の総選挙では各ブロックにどのような投票行動が見られたのか。あるいは、このような区切り方は妥当性を失ったのか。

半島部で与野党の勢力がほぼ拮抗している状況で、ボルネオ２州の動向が国会全体の勢力を決めることになる。サバ州とサラワク州のBN支持政党は引き続きBNを支持するのか。とくにこれから１年以内に州議会選挙を迎えるサラワク州の動きはマレーシア政治全体にどのような影響を及ぼしうるのか。

また、半島部では、2008年の選挙で誕生した五つ（後に四つ）の野党州に対して、PRは行政担当経験が不十

分であるとか、野党州では国と州で政策が異なるので非効率であるとかいった批判も聞かれたが、州議会選挙では四つの野党州のうち３州でPRが州政権を維持し、５年間の統治実績をふまえてPRによる州政権が信任されたかたちとなった。州ごとに与野党の支持が分かれる状況で、半島部でも「州の連邦制」は実質化していくのか。今後のマレーシア政府は民族別ではなく州別に分析しなければならなくなるのではないか。

問題関心③――政治文化は変容するのか

民族混成社会マレーシアでは、互いの考え方や価値観が異なることを前提に、互いに箍を嵌めあう「決まりは決まり」、「言葉で戦う」という政治文化を形作ってきた。これまで、政治や政治家に不満はあっても、制度に対する信頼はおおむねあったと言える。もし今回の選挙結果によって制度が信頼を失い、直接行動に出る人々が増えたらどうなるのか。これまでの政治文化は失われて違う方向に向かうのか。

メディアへの信頼に関して、新聞・テレビの情報と、インターネットを通じたソーシャルネットワークサービス(SNS)などの情報に対する受け手の信頼度の違いが挙げられる。マレーシアでは、新聞・テレビはBN寄り、SNSはPR寄りとする見方がかなり受け入れられている。ただし、すべての有権者がSNSの情報を利用しているとは限らない。SNSの選挙への影響をどのように評価すればよいのか。

マレーシアでは、「決まりは決まり」、「言葉で戦う」という考え方のもと、問題があると政党や議会を通じて解決を図るという考え方が広く受け入れられてきたが、1990年代末頃から政府や政策への批判を表明するために街頭に出て批判行動をとることも多く見られるようになってきた。その影響と意味をどう考えればよいのか。

今回の選挙でこれまでの選挙との違いが際立ったことの一つに、インターネットや動画などのメディアの利用が挙げられる。政治集会で候補者が映像を使って自らの主張を示したり、政治集会の様子を自分たちで録画してインターネットで配信して当日参加しなかった人たちにメッセージを伝えようとしたりすることが見られた。政治集会の動画配信では異なる政党どうしがインターネット上で論争する場面も見られた。インターネットには、政党や政治家たちが世界に向けて発信し、また他陣営と対話する新しいメディアとしての意味があるのではないか。

選挙後、PR支持者は今回の総選挙が不正だと訴えて抗議集会を組織した。死票が増える小選挙区制や都市部と農村部で１票の格差が大きい選挙制度をとっていることをどのように理解すればよいのか。もし現在の選挙制度が民意を反映させるのに適切でないとしたら、マレーシア社会で民意を反映させるためにより適切な選挙制度はどのようなものか。仮に選挙区割りや投票行動が同じで中選挙区制だった場合、選挙結果は大きく違ったものになったのか。それとも、この仕組みにはマレーシアなりの民意の反映のさせ方が反映されているのか。

マレーシアに生まれつつある「新しい政治」の萌芽を多角的に分析

研究会の第一セッションでは、2013年総選挙の概要を確認した(なお、プログラム上は中村報告をはじめに行い、その後に鈴木報告を行うことになっていたが、技術上の問題により中村報告と鈴木報告の順番を入れ替えて行った)。

鈴木は、与党連合BNと野党連合PRのマニフェストを比較し、両者がほぼ同じ内容を掲げていることを確認した。各選挙区を民族構成によって分類して投票傾向を分析してきた中村は、従来BNが強かった民族混合区でBNが勝てなくなってきた傾向が今回の選挙で強まったことを指摘した。

第二セッションでは、ブミプトラ(原住民)の選挙を検討した。塩崎は、主に半島部のマレー人の間で勢力を伸ばそうとしているPASの選挙戦略を整理した。PASはイスラム国家樹立を究極の目的とし、その実現のための手法や過程についての意見は多様だが、イスラム国家樹立を目的とすることはゆるぎないとしたうえで、PASがDAPと連携しているのはイスラム国家樹立という目的を実現する手段としてであり、状況によってはいつでも華人との連携をやめるし、UMNOとの連携も選択肢にあると論じた。

山本は、半島部でマレー人の与野党の勢力が拮抗する中で重要性を増しているサバ州の政治状況を整理した。2003年にサバ州の政治構造が変化してUMNO優位の形が作られ、カダザン人や華人はこれに反発して半島部の野党と連携しようとしたが、サバ州のUMNO支持者は現体制に不満が少なく、サバではUMNOを中心にBNが大勝した。なお、依然としてサバ州とサラワク州の役割は重要であり、とくにサラワク州では2014年までに州議会選挙が実施されるこ

タブレット端末で動画を撮影し、インターネットで共有する参加者がいるなど新しいメディアが活用されていた〈サバ州ケニンガウでのチェラマ〉

投票率は、サバ州、サラワク州を含むマレーシア全体で84.4%にのぼった〈サバ州トゥアランの投票所〉

とになっており、その結果によってはサラワク州の与野党のバランスが崩れ、ひいてはマレーシア全体の与野党バランスに影響を及ぼす可能性もある。

第三セッションでは、非ブミプトラや都市住民の視点から今回の選挙を検討した。マレーシアの経済成長とともに拡大してきた都市中間層や非ムスリム・マイノリティがインターネットやSNSといった新しい技術を導入することでどのような「新しい政治」に向かおうとしているのかが検討された。

非マレー、イスラム政党、ボルネオ２州から考えるマレー社会の亀裂

互いに考え方が異なるさまざまな人びとが常に出入りしている混成社会マレーシアでは、考え方の違いが奪い合いや殺し合いに発展するのを防ぐためにいろいろな工夫を発展させてきた。その一つを大掴みに表現するならば、ウチとソトを分けたうえで、ウチのことには互いに干渉しあわず、ソトでは「決まりは決まり」、「言葉で戦う」に則って互いに箍を嵌めあう人間関係だと言える。

多民族的な構成を持つマレーシアは、ウチとソトの境界を国家の境界ではなく国内の各民族の境界とすることで、国内に多民族的な構成を持ちながらも国全体がある程度のまとまりを持つ仕組みを作ってきた。その結果、マレー人、華人、インド人、サバ、サラワクといった複数の文化要素が混在する多彩な社会が作られる一方で、ウチとソトの境界意識が国内に維持されたまま今日に至ることになった。

国内の境界意識を克服してマレーシア社会全体で一つのウチ意識を育てようとする試みはいろいろとなされてきたが、その一方で、とくに1990年代末以降、半島部のマレー人社会内部の社会的亀裂が深刻になり、マレー人社会の内部でウチとソトの境界意識が強く見られるようになった。従来、マレー人は、自分たちと異質な人びとと出会ったとき、それをマレー人社会にとってソトの存在だと見なすことで自分たちマレー人社会の同質性を確認し、心の穏やかさを保ってきた。しかし、1990年代末以降にマレー人社会の内部にソトが出現し、互いにそれを解消しきれない状況で、マレー人社会は大きな混乱を迎えているように見受けられる。

この状況はマレー人自身が解消するしかないが、それに関わりうる要素として、非マレー人、イスラム政党、ボルネオ２州の三つに注目したい。

選挙から間もない2013年５月頃には、ナジブ首相をはじめとするマレー人の政治家や知識人がBNの「大敗」の原因を「華人の津波」と語ったことに人びとの関心が向けられた。ただし、その後の状況から振り返るならば、「華人の津波」と語ったマレー人たちの主要な関心事は華人コミュニティの行方ではなかったようだ。

半島部では、選挙の前からマレー人がUMNO支持派とPKR支持派との二大勢力に分かれ、両者のあいだで社会的コミュニケーションが断たれるという亀裂が深刻化していた。選挙で大差で勝ち負けがはっきりすれば対立が解消に向かう可能性もあったかもしれないが、選挙の結果、半島部の与野党の勢力が85対80でほぼ互角だったため、両者の亀裂はさらに深刻さを増した。「華人の津波」という発言は、マレー人社会の亀裂があまりに危機的な状況だったため、責任をマレー人社会の外部に転嫁することで危機から目を背けようとしたマレー人たちが特に深い意味なく発してしまった言葉だったのではないだろうか。

マレー人の分裂状況は今後どうなるのか。いくつかの選挙区では選挙結果の無効を訴えて裁判になっている例もあるが、選挙で負けた候補者が選挙結果の無効を訴えて裁判を起こすことはマレーシアで選挙のたびに見られたことであり、特別なことではない。PRと支持者は選挙が不正だったと訴えて抗議集会を開いており、その規模の大きさはこれまでマレーシアで見られないほど大きなものだが、それらの抗議集会が具体的な政治行動に繋がる様子は特に見られない。

マレー人の内部のUMNO支持派とPKR支持派の亀裂は解消されていない。PKRは1998年にUMNOから離脱した人びとが組織した政党であり、両者の関係は感情的な対立を含むために亀裂は簡単に修復できないかもしれない。むしろ、両者と一定の距離をとってきたPASが仲介役となりうるかもしれない。一般に、PASはクランタン州を基盤としてイスラム国家樹立を掲げる政党で、貧しくてもイスラム国家樹立を目指す人びとの政党だと見られているようである。ただし、PASの支持基盤はクランタン州だけではない。たとえばトレンガヌ州では、UMNOに対する批判票を投じる先としてPASが支持を伸ばしており、開発を求めるムスリムの受け皿としてPASが機能していると言える。やや乱暴な言い方をすれば、トレンガヌ州のPASはクランタン州のPASに比べて「話のわかるイスラム」だと見られる可能性があり、UMNO支持派とPKR支持派の二つに分かれてしまったマレー人社会が互いに対話する仲介役が期待される。

私たちは選挙で何を選んでいるのか——マレーシアの試みが教えるもの

都市部の住民はリテラシーが高いが、農村部の住民はリテラシーが低いために新聞やテレビの報道をそのまま信じる傾向が強く、そのためBNへの支持が高いという議論がある。これは、農村部の住民のリテラシーが高ければ新聞やテレビなどの既存メディアに書かれていることが嘘だと見抜き、PRを支持したはずだとの考え方が前提にある。

農村部の住民、とりわけ高齢者層は、インターネットへのアクセスが十分でなく、得られる情報源が限られているかもしれない。ただし、都市部の住民はBN側とPR側の主張をどちらも理解したうえで支持政党を決めているのではなく、人間的な繋がりなどで支持する陣営を決め、相手側陣営の主張には全く耳を貸さないという態度をとる人も多い。

上で描いた都市部住民と農村部住民の姿は、わかりやすくするために極端な描き方をしており、現実にはさまざまな人がいる。ただし、ここでの問題はそれではない。問題とされるべきは、インターネットへのアクセスなどの情報源が限られている人びとは支持政党を選ぶ際に適切な判断ができないとする考え方である。

農村部の市場で朝から夕方まで売り場に座り込んで野菜を売っているおじさんたちやおばさんたちに話を聞くと、BNとPRがそれぞれどのようなマニフェストを掲げているか知らない人も多い。そもそも、BNとPRはそれぞれどのような政党から構成されているかといった基本的なことがらについて正しい理解をしていない人も多い。とくに他民族の政党についての知識が低く、マレー人は自分の支持政党がMCAとDAPのどちらと連立しているかわからないという人も珍しくない。

それでもなお、地元の選挙区から立候補した人物のことを聞くと、どのような家に生まれ、学生時代にはどのような様子で、政治家になってどのようなことをしてきたかといった情報や、なによりもその人物が人として信じられるかどうかについて、さまざまな話を聞かせてくれる。地元の政治家について、いろいろな情報をもとにした判断を持っていることがわかる。

その人物がどんな政治的信念を持っているか、そしてその人物が所属する政党がどのような政策を掲げているかはあまり知らずに、人物評を中心に支持者や支持政党を決めている。このような態度を政治的な未成熟さの表れと見る人がいるかもしれない。

しかし、ひるがえって考えてみると、私たちは選挙で何を選んでいるのか。選挙ごとにいくつかの争点があり、党首や候補者の考え方が新聞やテレビで報じられる。日本の郵政民営化のように一つの争点が突出して話題となる選挙もあるが、多くの選挙では争点は複数あり、それぞれの争点で自分の主張と合致する政党を探すのはまるでパズルのような作業となる。

先の問いに返って、私たちは選挙でそれぞれの争点に対する判断を選んでいるのだろうか。決してそうではないはずだ。状況は日々変化するし、いくつもの争点が相互に繋がって影響しあうこともある。そのように、変化する状況のなかで、いろいろな考え方を持つ人たちの意見を調整して何らかの決断を下さなけ

ればならないとき、いろいろな事情を考慮して、自分が代表する人びとの利益を最も反映させるように判断するのが代議士の役割であり、私たちが選挙で選んでいるのはそのように判断を任せてもよいと思える人物なのではないか。

その意味で、極端なことを言えば、代議士が当選後に主張をかえたとしても、それがその代議士が代表する人びとの利益に合致しているのであれば、認められるとする考え方も成り立つことになる。重要なのは、当選時の立場を堅持することではなく、自身が代表する人びととの連絡を密にしたうえで判断をくだすことということになる。

日本では国会議員の定数削減が話題に上る。その理由として、財政の緊縮化・効率化が挙げられる。これに対して、マレーシアでは国会・州議会ともに議員定数を増やし続けている。このため各選挙区の有権者数が少なくなり、ときには数十票差で当落が決まることがある。議員定数が多くなるということは、有権者一人ひとりの票の重さが相対的に重くなることを意味している。

問題は、住民をうまく代表するにはどのように枠組みを設定すればよいかということになる。マレーシアがこれまで積み重ねてきた工夫は、①歴史的にも文化的にも背景が異なるボルネオ２州には半島部マレーシアよりも大きな比重の代表権を与えること、②半島部でも農村部には都市部よりも代表の比重を高くすること、③選挙区は地理的な境界に基づいて決めるが、民族別に政党を作って連立させること、などである。全国津々浦々まで１票の重さを等しくしようとすることによってではなく、地域や民族性によって１票の重さをいろいろと調整することで選挙が「公正」なものになるように試みている。その鍵は、有権者と政治家の繋がりを密にすることだ。マレーシアの選挙制度と選挙結果はそのような試みとして理解できる。

マレー人優遇ではないブミプトラ政策へ？ ――マレーシアの知恵と心情

最後に、選挙から４か月を経て、2013年９月16日のマレーシア結成50周年をサバ州コタキナバルで迎えた筆者の考えを記しておきたい。本研究会の議論からはやや外れており、また、具体的なデータに基づく論証ではなく筆者の印象による部分が多いが、マレーシア社会のあり方についての一つの見方として提示したい。

今回のマレーシアの総選挙の結果とその後の政治状況について、さまざまな「不思議」が指摘されている。得票数では野党連合の方が多かったのに、議席数では与党連合が野党連合を大きく上まわったこと。その大きな理由は都市部と村落部で１票の重みが異なることで、マレーシアの多くの人びともそのことを理解しているが、それでもその状況を積極的に変えようとする動きがあまり見られないこと。しかも、選挙区割りが憲法で規定されており、今回の総選挙で与党連合は国会で憲法改正に必要な議席数を得られなかったため、このままでは選挙区割りの変更ができないこと。都市居住者を中心とする野党支持者はかつてないほどの大きな規模で選挙の無効を訴える抗議集会を行ったが、抗議集会を超えて政府を倒す具体的な動きにはつながっていないこと。また、選挙結果と直接関係ないが、ナジブ首相が総選挙後にブミプトラを優遇する方針を発表したことも一部では驚きをもって迎えられた。これらの「不思議」をどう理解すればよいのか。

マレーシアの選挙で興味深いことの一つに、かなりの数の人びとが実際の居住地ではなく生まれ故郷で有権者登録していることがある。就職や結婚などによって生まれ育った土地を離れても、現在の居住地に有権者登録を移さない人はかなり多く、マレーシアでは総選挙のたびに投票のための帰省ラッシュが報じられている。

今回の選挙結果を都市部と村落部の対立の構図で捉えようとする説明がある。クアラルンプールやその近郊の都市部には現政権に批判的な人びとが多いが、村落部（半島部の村落部およびサバ州・サラワク州）には現政権の支持者が多く、都市部でいくら野党連合が支持を集めても１票の格差のために全体で与党連合が過半数を占める仕組みになっているというのが野党連合支持者の批判だ。しかし、実際の居住地と有権者登録地の食い違いについての資料がないので具体的な割合を示すことはできないが、都市部居住者には村落部出身者が少なくなく、選挙では生まれ故郷である村落部に帰省して投票している。都市部の有権者と村落部の有権者をどう線引きすればよいのか。

この問いはさまざまな角度から検討することができるだろうが、ここではサバ州とサラワク州に目を向けて考えてみたい。2013年５月の総選挙後、ナジブ政権はサバ州やサラワク州に対する開発プロジェ

クトを積極的に進めている。サバ州もサラワク州も住民の多数はブミプトラだが、マレー語を日常的に話し、イスラム教を信奉し、マレー人の慣習に従うという意味でのマレー人ではない。サバ州やサラワク州のブミプトラの多くはマレー語以外の言葉を母語とし、非イスラム教徒も少なくない。

半島部マレーシアだけ見ていると、ブミプトラとはマレー人であり、非ブミプトラとは華人とインド人であり、したがって「ブミプトラの優遇」とは華人やインド人に対してマレー人を優遇することと理解されるのが一般的だろう。しかし、ブミプトラが多様な民族集団から成り、マレー人がその一部にすぎないサバ州やサラワク州では、「ブミプトラの優遇」とはマレー人の優遇をただちに意味しない。マレー人を含む半島部の住民に対してボルネオ島のブミプトラ諸族を優遇するという文脈で使われることもある。

半島部出身のマレー人であるナジブ首相が、サバ州とサラワク州のブミプトラの優遇を約束した。与党連合BNの総裁として、BN政権を維持するには大票田であるサバ州とサラワク州の支持を確保しなければならないという背景がある。しかも、サバ州とサラワク州は1票の重みが相対的に重いため、より厚く手当てしなければならない。そこにはナジブ首相の個人的な考え方も反映されているかもしれないが、興味深いのは、ナジブ首相の態度がマレーシアの政治制度と政治状況に導かれた結果であることだ。

1963年のマレーシア結成の際に合意されて連邦憲法に反映されたことがらの一つに、「連邦政府におけるサバ州とサラワク州の代表は人口比のみによってではなく両地域の潜在的な発展可能性も考慮して決める」という項目があり、そのためサバ州とサラワク州では１票の重さが半島部マレーシアよりも重くされてきた。半島部マレーシアが物質的な開発という目標の前にまとまっている限りサバ州とサラワク州は少数派だが、半島部マレーシアが十分に開発を遂げ、物質的な開発以外の価値を巡って国論が分かれるようになると、サバ州とサラワク州の支持を取り付ける必要が生じ、そのため物質的な開発の面で遅れがちだった両州に対する優遇政策を進めなければならなくなる。

これは首相や他の政治指導者の個人的な思いやりのためではなく、憲法を頂点とする法制度によってゲームのルールがそのように定められているため、そこから逃れることはできない。興味深いのは、マレーシアの人びとがそのような仕組みを自分たちで作り、そしてその仕組みによって自分たちを縛り、サバ州やサラワク州に開発の恩恵を届けようとしていることだ。もちろん、この仕組みを作ってきた人びとが今日の事態を想定していたわけではないだろうが、マレーシア社会の集合的な意志がこのような仕組みを作り上げてきたように思えてならない。

また、このようなマレーシアの集合的な意思（あるいは知恵）は、現政権の支持者だけでなく現政権に批判的な人びとの間でも共有されているとも考えられる。クアラルンプールやその近郊の都市部に住み、現政権を批判し、ブミプトラ優遇政策を批判する人たちも、実はサバ州やサラワク州などの生まれ故郷で有権者登録をしており、生まれ故郷の発展を思って投票する人が少なくない。都市部に居住していても、有権者としては都市部住民ではなく村落部住民だということになる。

都市部住民には、現政権に批判的な人が多いという。野党主催の抗議デモには数万人が集まる。都市部の大学で教える大学教員も、現政権に対して批判的な内容の発言をする人が少なくない。都市に住む知識人として、そしてとくに非マレー人の場合は民族的少数派として、公の場で政府のブミプトラ優遇政策を批判しないわけにはいかないという事情はあるだろう。しかし、個別に話を聞くと、連邦政府がサバ州やサラワク州に開発の恩恵を与えることを支持している人も少なくないという印象がある。

人間は気を抜くと楽をして自分だけ儲けようとするものだという理解のもと、政府に対して監視の目を光らせ、少しでも悪い方向に向かう兆しがあれば直ちに批判の声をあげなければならない。しかし、現政権を別の政権に替えれば問題がすべて解決するわけではない。権力は例外なく腐敗するものであり、別の政権になったところで似たような問題から逃れることはできない。監視の目を光らせながら、そして何かあったらいつでも別の政権に交代させるという本気の度合いを見せながら、その時どきの政府に統治させるのが最善の手ということになる。

多少の問題があるとしても、白黒をはっきりつけさえすれば問題がすべて解決するというわけではなく、多少の問題を抱えながらそれを乗りこなしていかなければならない。都市部に住む野党支持者が現政権への抗議集会に集まってもそれ以上の具体的な動きに結びつかないことの背景には、そのような心情があるのではないだろうか。